



Newsletter

No.27 (2012.9.3 発行)

JAICOWS 総会議事録

日 時 2012年3月24日(土) 13:00 ~ 14:00
場 所 専修大学8号館5階5A会議室
出席者 岩井宜子、国枝タカ子、袖井孝子、田原淳子、鳥居淳子、直井道子、原ひろ子、吉沢豊予子
(50音順・敬称略)

議 事

1. 総会の成立について

出席者8名、委任状51名により過半数(会員数113名)を超えていることから、本会が成立することが確認された。

2. 2011年度会計中間報告について

事務局より、2011年度会計の中間報告(2012年3月8日現在)がなされた。

※ 後に入手した最終的な会計報告を次ページに掲載していますのでご参照ください。

3. 2012年年度事業計画について

役員会より、平成24年度事業計画について提案され、下記事業を行うことが了承された。

- ・ニュースレターの発行(27号、28号)
- ・講演会、勉強会の開催
- ・その他

※ 予算案を3ページに掲載していますのでご参照ください。

4. 研究会の開催について

役員会より、研究会を定期的に開催することが提案され、了承された。

・第1回研究会は、浅倉むつ子氏に講師を依頼することになった。開催日時・場所については事務局が調整し、会員にはメールで周知することになった(メールアドレスが不明の会員には郵送)。開催場所は城西国際大学(ジェンダー女性学研究所)を予定。

・第2回以降については、今後検討することになった。

なお、研究会の開催にかかる費用については、行事費から支出することが決定された。

※ すでに開催された内容がこのニュースレターに掲載されていますのでご覧ください。

5. 次期学術会議会員に女性を確保するための方策の検討

日本学術会議の若手の女性連携会員に対して、入会を勧誘するとともに、次期の推薦を多く行うように考えていかなければならない。そのために若手への働きかけをより活発に行うことが確認された。

6. 学会事務局の移転について

2012年度より事務局を田原淳子役員にご担当いただくことになった。それにともない、事務局の住所地を下記に移転させることが決定された。

【新事務局】

〒206-8515 東京都多摩市永山 7-3-1
 国士舘大学体育学部 田原淳子研究室
 E-mail: tahara@kokushikan.ac.jp

なお、当分の間はワールドプランニングとの連絡等、岩井宜子役員が連携して行うこととなった。

2011 年度会計決算報告

(2012年3月31日現在)

1. 収入の部

(単位：円)

勘定科目	①予算額	②決算額	差異(②-①)	備 考
繰越金	654,744	654,744	0	
会 費	510,000	493,000	△17,000	94人分 (89%)
利 子	300	97	△203	
寄 附	0	200,000	200,000	
収入合計	1165,044	1,347,841	182,797	

2. 支出の部

勘定科目	①予算額	②決算額	差異(①-②)	備 考
通信費	30,000	21,980	8,020	請求書発送費, 切手代, 総会案内用往復葉書代
Newsletter 印刷費	170,000	37,800	122,390	No.26
Newsletter 発送費		9,810		
行事費	50,000	0	50,000	講師謝金等
会議費	25,000	21,565	3,435	弁当代等
交通費	10,000	0	10,000	
学会業務委託費	420,000	420,000	0	
予備費	460,044	17,325	442,719	慶弔費, 残高証明書代, 振込手数料等
支出合計	1165,044	528,480	636,564	
次年度繰越金		819,361		

※ 会員数 106名 (2012年3月31日現在)

馬場房子先生に監査をしていただきましたのでご報告します。

2012年度予算案

1. 収入の部

(単位：円)

勘定科目	予算額	備 考
繰越金	819,361	
会 費	530,000	106人分
利 子	100	
その他	0	
収入合計	1,349,461	

2. 支出の部

勘定科目	予算額	備 考
通信費	30,000	会員勧誘通信費, 切手代, 総会案内用往復葉書代等
Newsletter 印刷費 Newsletter 発送費	170,000	No.27, No.28
行事費	50,000	講師謝金等
会議費	25,000	弁当代等
事務費	50,000	
学会業務委託費	420,000	
予備費	604,461	残高証明書代, 振込手数料等
支出合計	1,349,461	

※ 会員数 106名 (2012年3月31日現在)

JAICOWS 役員会報告

- 日 時 2011年12月14日(水)
18:00 ~ 20:00
- 場 所 専修大学8号館5階5A会議室
- 出席役員 岩井宜子、国枝たか子、田原淳子、直井道子、原ひろ子
(50音順・敬称略)
- 議 事 全体として2012年3月の総会準備
※ 総会議事録参照
とくに事務局体制の移行、研究会の発足などについて論じられた。

赤松良子賞受賞者 古橋源六郎氏の講演（2011年12月11日）要旨

今年度の赤松良子賞受賞者、古橋源六郎氏の講演が感動的なものであったと人づてに聞かれた原ひろ子会長が、その講演要旨を入手され、私どもも原先生の解説付きでその内容を伺いました。ぜひこの紙上でもお伝えしたいと考え、以下に要約しました。（ ）内は原先生の解説です。

なお、この全文が、国際女性の地位協会の年報『国際女性』26号（2012年12月発行）に論文として掲載されますので、ご興味のある方はぜひご覧ください。

男女共同参画社会の実現を目指して — 先輩・同士とともに歩んだ15年

1. 男女共同参画社会基本法制定まで

古橋氏は大蔵官僚として勤務されていた1962年、3年間ロンドン大使館に勤務され、そこでイギリスの優秀な女性大蔵省幹部に出会いカルチャーショックを受けられます。

帰国後、日本でもこれに刺激され、労働省、農林省などの有能な女性官僚などとの出会いがあったわけですが、それが1991年婦人問題企画推進本部機構に関する検討委員会委員に就任されたことにより、現実の政策実現への道につながっていきます。

この委員会は1993年に「今後の婦人問題企画推進本部の在り方について」という報告書を提出しますが、それまで各省庁への理解浸透に苦慮されます（大蔵省の男性が言うことだから一応聞いてみようという効果があったわけで、女性だけではなかなか達成されなかったことでしょう）。

1994年になると政令に基づく男女共同参画審議会が設置され、委員20人のうち男性8人の中の委員の一人として就任されます。合計40回の委員会のうち、1996年にはその答申「男女共同参画ビジョン」が出ます。これは基本法の必要性を公的機関として最初に指摘し、1999年の男女共同参画社会基本法への道を開くものでした。

男女共同参画社会の必要性について、人権尊重に基づくものとするか、少子高齢化にともなう労働力確保などの経済社会環境の変化を挙げるのと、どちらが男性に対してより説得力があるかという議論があり、最終的には経済社会環境に関わらず、人権の尊重が求められる普遍的な大原則であるので、人権の尊重を基本理念とすることにしました。

ここから実現まではまだ紆余曲折がありましたが、1999年男女共同参画社会基本法が公布・施行されます。この際は野中広務官房長官のご尽力が大きいものでした（省庁改編で国会の審議日程が立て込む中、参議院先議の提案をされ、国会通過が可能となったそうです）。

2. 制定後

その後、第一次基本計画（2000年）の策定、総合調整機能を持つ男女共同参画局の発足、苦情処理・監視専門調査会による被害者救済に関するシステムの強化など、政策を実現していく体制が強化されます。2005年には第2次基本計画が閣議決定され、新たな取り組みを必要とする分野として科学技術、防災、まちづくりなどが追加されました。

また、国際的な女性差別撤廃条約（1985年批准、選択議定書は未批准）の国内取り入れについての取り組みが行われました。その中で「間接差別」の定義付け、女性に対する暴力、人身取引やILO条約への対応などが議論されました。

2010年に第3次基本計画が策定され、貧困の支援や男性、子供にとっての男女共同参画や2020年までに指導的地位に女性が占める割合を30%程度にすることなどが今後の重要課題として注目されます。

これらの過程を振り返り、古橋氏は、見ざる、聞かざる、言わざるではなく、多方面から意見を聴いて、問題点を発掘し、意見を言っ、抵抗勢力を説得しながら**実行する**ことが重要だと指摘され、同志の協力のもとに歩んだ15年の戦いの記録だと総括されています。

第 22 期日本学術会議と男女共同参画・ジェンダーの現状

浅倉むつ子（早稲田大学・第 22 期日本学術会議会員）

2012 年 6 月 27 日 城西大学において

1. 第 22 期日本学術会議の女性比率

第 22 期は、2011 年 10 月から 2014 年 9 月までの 3 年間です。その会員 210 名中、女性会員は 49 名で、23.3%にあたります。過去の女性比率をみますと、第 19 期は 6.2%、第 20 期は 20%、第 21 期は 20.5%でした。したがって会員の女性比率は徐々に上がってきています。ただし、分野ごとの女性比率には偏りがあります。第 1 部では、会員 72 名中 26 名が女性ですが、それに比べて、第 2 部は 67 名中 13 名、第 3 部は 71 名中 10 名と、比較的低い割合にとどまっています。

さらに連携会員の女性比率が、会員比率よりも低いという問題もあります。第 22 期の連携会員 1,900 名中、女性は 313 名で、女性比率は 16.5%です。第 21 期の連携会員の女性比率は 12.5%でしたから、こちらも徐々に上昇傾向にはありますが、会員の女性比率には届いていません。考えなければならぬことは、第 22 期の女性会員 49 名中、残任期間 3 年の女性会員が 29 名いることです。この方たちは、2014 年以降、会員としては再任されませんから、第 23 期に向けて女性会員比率を引き上げるための準備を、今からやっておく必要があります。

2. 第 22 期の体制と女性の視点

第 22 期の学術会議では、女性会員の活躍が目立っていると思います。たとえば、幹事会をみても、副会長に春日文子氏、第 1 部の副部長に大沢真理氏、幹事に後藤弘子氏、第 3 部の幹事に土井美和子氏がいます。副会長の春日先生は、お若いながらもめざましい活躍をされ、国内外に学術会議のプレゼンスを高めておられると思います。

また、第 22 期は、女性の視点を学術会議の活動に活かすという点でも成功しているのではないかと思います。その例は、東日本大震災復興支援委員会の「提言」にもみられます。たとえば「産業振興・就業支援分科会」の提言は、被災地労働市場のミスマッチに着目して、被災地の雇用保険受給者男女比等、ジェンダー統計の視点をとりいれました。これは、メンバーに女性が入っていなければ気づかれない視点だと思えます。

もちろん女性の視点を活かすというのは、22 期に始まったことではありません。『学術の動向』の編集委員長（科学者委員会「広報分科会」）は、代々女性です。島田淳子先生、原ひろ子先生、岩井宣子先生から、20 期には浅倉が引き継ぎました。21 期には桜井万里子氏、22 期は辻村みよ子氏が就任しています。広報という意味では大きな役割だと思えます。

3. 男女共同参画・ジェンダー関連の分科会

男女共同参画やジェンダーといった課題について、第 22 期には頼もしい方々が活躍されています。科学者委員会の男女共同参画分科会の委員長は江原由美子氏です。

第 22 期には、分野別委員会に附置される分科会として、ジェンダー関連では 4 分科会が発足しました（いくつかは前期からの継続ですが）。社会学委員会「ジェンダー研究分科会」（委員長 上野千鶴子氏）、史学委員会「歴史学とジェンダーに関する分科会」（委員長 井野瀬久美恵氏）、法学委員会「ジェンダー法分科会」（委員長 浅倉むつ子）、そして、特筆すべきは、上記 3 分科会に加えて、これらを連携させて包括する分科会として、社会学委員会に「複合領域ジェンダー分科会」（委員長 上野千鶴子氏）が設けられたことです。したがって、4 分科会の合同会議も可能になりました。

メリットは、分野別委員会の下でジェンダーに関わる分科会を構成できないという分野の会員・連携会員の参加をつのることができるようになったことでしょう。

今後、この「複合領域ジェンダー分科会」を中心に、①次期会員の女性比率の向上、②4 分科会が連携

してシンポジウム等を企画、③学術会議の提言にジェンダー視点を反映させる「要望書」作成、④ジェンダー関連学協会との連携を図る活動などが、行われていくことが期待されています。ジェンダー関連学協会には、JAICOWSも参加していただいていると思います。

当面、2012年10月13日（土）13時～17時に、公開シンポジウム「雇用崩壊とジェンダー」を、学術会議講堂で開催します。JAICOWSも共催団体になっています。今後も、さまざまなシンポジウムを企画して、開かれた学術会議になっていければよいと思います。

日本学術会議公開シンポジウム「雇用崩壊とジェンダー」のお知らせ

下記のようにJAICOWSが後援しているシンポです。ふるってご参加ください。

日 時 2012年10月13日（土）13:00～17:00
場 所 日本学術会議講堂 〒106-0032 東京都港区六本木7丁目22-34
主 催 日本学術会議・社会学委員会複合領域ジェンダー分科会
共 催 社会学委員会ジェンダー研究分科会／史学委員会歴史学とジェンダーに関する分科会
／法学委員会ジェンダー法分科会／科学者委員会男女共同参画分科会／東北大 GCOE
ジェンダー平等と多文化共生研究センター／京都大学 GCOE 親密圏と公共圏の再編成
をめざすアジア拠点／京都大学文学研究科アジア親密圏/公共圏教育研究センター
後 援 日本女性学会／ジェンダー法学会／ジェンダー史学会／日本フェミニスト経済学会／
日本スポーツとジェンダー学会／日本女子体育連盟／イメージ&ジェンダー学会／日本
ジェンダー学会／日本女性心身医学会／総合女性史研究会／国際ジェンダー学会／東海
ジェンダー研究所／ウィメンズ・アクション・ネットワーク（WAN）／女性科学研究者の
環境改善に関する懇談会（JAICOWS）／働く女性の全国センター（ACW2）
連絡先 tokyo-office@wan.or.jp

プログラム

司 会 岡野八代（同志社大学・学術会議連携会員）、後藤弘子（千葉大学・学術会議会員）
開会挨拶 上野千鶴子（複合領域ジェンダー分科会委員長・学術会議会員）
報 告
1) 「非正規雇用問題・パート派遣について」 中野麻美（弁護士）
2) 「男女賃金格差について」 竹信三恵子（和光大学）
3) 「専門職の非正規問題 ― 一女性医師の場合」 桃井真里子（自治医科大学・学術会議会員）
4) 「国際比較の観点から」 田宮遊子（神戸学院大学）
コメンテーター
大沢真理（東京大学・学術会議会員）、浅倉むつ子（早稲田大学・学術会議会員）
討 論
閉会挨拶 井野瀬久美恵（歴史学とジェンダーに関する分科会・学術会議会員）

第23期学術会議会員・連携会員に女性の推薦を

JAICOWS研究会第1回の浅倉会員の記事に見られるように、学術会議の第22期（2011年10月から2014年9月まで）の女性会員比率は23.3%であり、徐々に増加の傾向があるばかりでなく、幹事会においても活躍し、また女性の視点を活かす活動を行ってきたという意味でも大きな貢献をしたと評価できます。ただし、23期以降も女性の活躍を量質ともに拡大していくためには、会員や連携会員の推薦の際に、これまで以上の努力が必要だという見通しが持たれています。

その根拠は、第一に第22期の女性会員49名中、残任期間3年の女性会員が29名いることです。この方たちは、2014年以降、会員としては再任されませんから、女性会員比率を引き上げるためには第23期

に向けて積極的に女性会員を推薦していく準備を今から進める必要があります。

もう一つの問題は、第22期の連携会員の女性比率が16.5%と会員の女性比率を下回っていることです。連携会員を経なくても会員になることはできますが、会員へのプロセスとして大きな役割を果たしていることも確かです。ただでさえ少ない女性連携会員から会員への推薦の多くがなされることを考えると、新たな連携会員を増やし、連携会員の女性比率を上昇させるための準備もより一層必要だということになります。推薦に際しては、会員、連携会員の分野の偏りがある程度是正できるような配慮も必要だということになるでしょう。

必要性を言い交わしているうちにあつという間に第23期に向けての推薦の時期が来てしまうような危機感にとらわれています。より具体的な準備をどう進めていくのが良いのか、役員会でも考えていきたいと思いますが、JAICOWSの皆様からのご意見もぜひ頂戴したいと思います。

女性科学者のインタビュー・リレー 〔10〕

「文化人類学・ジェンダー研究・市民運動とともに」

原ひろ子（城西国際大学客員教授）



1. 文化人類学の研究者修業時代

—— 日本における文化人類学リーダーの泉靖一先生によれば、原ひろ子さんはすぐれたフィールドワーカー（野外調査の専門家）であるとともに「冒険者」であるということですが、いかがでしょう？

私は高校1年生までの5年間を福岡で過ごしました。医師である父の東京転勤にともない、都立戸山高校へ転校、そこから東京大学の文科Ⅱ類に進学して杉浦健一ゼミ（文化人類学非常勤講師）に参加しました。ゼミは本当に楽しいもので、よく勉強しました。

ところが杉浦先生がご病気で急逝。ショックでした。当時、東大にはまだ、文化人類学専攻は駒場にも本郷にもなかった頃の話です。私たちは次の手を考えました。自分たちの未来のために。

—— どうなされたのですか？

杉浦ゼミに参加していた3人の学生は、アメリカから帰国なさったばかりの石田英一郎教授に直訴して、文化人類学専攻のコースを東大に創設してほしいと申し出ました。杉浦先生の授業記録のノートを差し出したり、さまざまの情報を駆使して泉靖一先生にも訴えました。

当時の東大総長は矢内原忠雄先生で、ご理解くださいました。先生方の熱意によって、1955年4月に「文化人類学」コースが教養学部教養学科内に設置され、のちに夫となる原忠彦たちとともに、めでたく1回生となることができました。

—— おめでとうございます。そうして書くことになった卒論はどんなテーマでしたか？

文化人類学分野では米国から次々とフルブライト研究者などが来日して、私たち学生は、彼らの助手（アルバイト）として、地方の野外調査などに行きました。マーガレット・ミード博士の村落訪問案内もしました。こうして私は専門的な方法論を身につけました。卒論は「育児と文化：開田村における子育ての三世代の変遷に関して」というテーマで仕上げ、大学院に進学しました。

—— その経験が種子となって、やがて博士論文に発展。代表的な著書「子どもの文化人類学」（晶文社発行 1979年）、「極北のインディアン」（中央公論社発行 1989年）、「ヘアー・インディアンとその世界」

(新潮学芸賞受賞、平凡社発行 1989 年)として、のちに実を結ぶわけですね。当時のアメリカでは、文化人類学の中心地は五大湖畔のシカゴ大学(シカゴ学派)でしたか？

いいえ、シカゴ大学だけでなくハーバード大学(マサチューセッツ州ケンブリッジ)、コロンビア大学(ニューヨーク)、カリフォルニア大学(バークレー)などが研究の中心でした。博士課程にいた私は、フィラデルフィア郊外のプリンマー大学の大学院に留学しました。うら若い娘だったので、振袖を荷物に入れて渡米しました。プリンマー大学では北方研究の権威であったフレデリカ・デ・ラグーナ教授の指導を受け、カナダ国立博物館調査員として、フィールド調査の研究費を獲得することができるようになったのです。

—— グラント(研究費)の応募は何のためでしたか？

念願の極北の北米先住民の野外調査のためです。2回にわたってフィールドワークをすることができました。グラントが受けられるという通知を手にした時は、本当にうれしかったです。これが1964年の学位取得(プリンマー大学人類学博士号)に結びつきました。

1964年夏、たまたま東京の拓殖大学で文化人類学の教員を募集しているという知らせを受け、帰国し、その年の10月1日から就職しました。その職がなければ、米国の大学で教員をしていたと思います。

拓殖大学の教員時代から日本民族学会(のちに日本文化人類学会と改称)の多様な役員を務め、また、日本学術会議関連の業務の裏方もしました。あちこちの大学を経て、お茶の水女子大学に勤務していた時に、第15期日本学術会議(SCJ)が声明「女性科学研究者の環境改善の緊急性についての提言」(1994年5月26日)を公表しました。

第12-14期にはSCJの女性会員は猿橋勝子(敬称略)のみであったのが、第15期には一番ヶ瀬康子、安川悦子、林雅子、加藤春恵子の4名になっており、この声明の公表の大きな原動力になっていたと思われまます。ところが、第16期の新会員の中には第6部に島田淳子(家政学研連)が入られたのみでした。そして、島田先生は16期において、広報『学術の動向』編集長、その他、多様な任務を担うことになられたのでした。16期の各研連の委員長にお触れが出て、研究連絡委員会委員の選定にあたり、女性を含めるようにという指示が出たのだそうです。その結果、私は7部制であった当時の第1部に所属していた「文化人類学・民俗学研連」の委員になりました。

その1994年の秋、一番ヶ瀬先生から私のところに電話があり、「島田先生が学術会議の重なる任務で大変。まわりでサポートしましょう」とのこと。そこで、SCJ第16期に研連委員になった56(58?)名の女性委員の有志と、元・前SCJ女性会委員でJAICOWSが結成されました。

SCJ第17・18期には、私は改組前の第1部会員となり、18期には第1部副部長を務めました。そして、島田先生の後任として、『学術の動向』の編集長を担当し、それを岩井宜子先生が引き継いで下さいました。SCJやJAICOWSでは、多様な研究分野の先生方に多くのことを教えていただき、今もその縁が続いております。

2. 災害・復興と男女共同参画6・11シンポジウム、そして学術会議会員

—— 東日本大震災が起こった時に、人々はどう行動したのか問われていますが、大津波、原発事故からわずか3カ月後の2011年6月11日に、日本学術会議の講堂を、多様な立場の女性たちが満席にして集まったのには驚きました。原先生はどのような役割を担っていらしたのですか？

日本学術会議の女性会員と会員OBやNGOの女性たちが力を集結したのです。その3年前の2008年に全国知事会は堂本暁子千葉県知事を中心として「女性・地域住民からみた防災施策のあり方に関する調査」(<http://www.nga.gr.jp/news/2008/post-336.html>)を行っていました。にもかかわらず、実際に大震災が起こってみると、高齢者(なかでも女性)や子どもを抱えた母親、病人、障がい者、外国籍の在留者など困難な状況におかれやすい人々が避難所などの生活で深刻な不自由を強いられたのです。避難生活が長くなればなるほど厳しい状況になりました。

そこで堂本暁子さんたち民間の女性が実行委員会を立ち上げ、学術会議の辻村みよ子さん(『学術の動

向』編集委員長)、大沢真理さん(人間の安全保障とジェンダー委員会幹事)、猪口邦子さん(人間の安全保障とジェンダー委員会委員長)たちと協力して、日本学術会議や女性関連のネットワークを使い、広く全国に働きかけました。

仙台市長、岩手や福島で被災者のために働いている公務員やボランティアたちが駆けつけて現地報告を行い、女性科学者たちは環境の視点やジェンダーの視点、女性支援の立場から「復興のための提言」をシンポジウムで発表しました。これによって「災害の概念」は整理され、海外における過去の被災地での生活再建プロセスに学ぶことができたのです。そして、その日の一般参加者たちとともに、女性の視点から「防災と復興のための施策」を日本政府に提案できました。

—— 発想から実行に至るスピードの速さには、いつもながら驚かされます。未曾有の津波や原発事故に対して、短期間に女性たちを結集させ、インパクトのあるロビイ活動を実現できたことに敬服します。原先生のお茶目なエピソードのあるスピーチも皆をなごませていました。さて、原先生が学術会議の第17期、第18期の会員を務めていらした頃の思い出を聞かせてください。

日本学術会議の月刊誌『学術の動向』の編集委員長を第16期の島田淳子編集長から引き継ぎました。「ジェンダー問題の多角的検討」特別委員会の委員として、2001年に『学術会議叢書3 男女共同参画社会～キーワードはジェンダー』の編集に参加し、2004年に『ジェンダー問題と学術研究』(ドメス出版)の共編者をしました。

また「アジア学術会議」でのジェンダー関連のワークショップのための活動も忘れられない経験でした。ゼロから始めて果実を挙げるまで、アジアの諸国(インドネシア、韓国、ベトナム、インド、日本、中国、シンガポール、フィリピン)でアジアの研究者たちとの会議を重ねて多くの刺激を受けました。

その他、科学技術基本計画(第2期～第4期)の策定に際して、ジェンダー視点を文章に加えるため、浅倉むつ子先生(労働法学)、岩井宜子先生(刑法学)、ほかの先生方とともに努力しました。非常勤講師の環境改善(例えば科研費を申請するための研究者番号の取得)や大学内に保育所を設置し運営する助成金の実現、博士課程の女子学生が育児や出産で休んでも再び復帰できるような学術振興会助成制度ができたのは、第19期の頃だったと記憶しています。いずれもJAICOWSの要望による活動でした。

—— 内閣府の男女共同参画基本計画でもご苦労されていませんか。

苦労とは考えていません。お茶の水女子大学ジェンダー研究センター教授やセンター長をつとめていた時代から、女性研究者の採用や登用の機会を改善したり、勤務する環境の整備、とくに保育所などの充実について目に見える形をとる制度として実現したかったのです。また、食の改善や健康、女性の身体に関わるテーマには意欲が湧きました。多忙だったことは確かです。

3. 小学校時代の戦争体験が生涯のテーマに・・・

—— さて話は戻りますが、ご自身の「子ども時代」はどのように過ごしていたのですか？

父は会津出身の医師でした。母は社会奉仕活動をしていました。敗戦までソウル(韓国)に住んでいました。私はソウルの京城師範附属第一国民学校単級(1年生から6年生までが同じ教室)という僻地用の実験校で学んでいました。敗戦の玉音放送はソウルで聴きました。敗戦後、両親より先に看護婦の池田さんに連れられて、私と弟はプサン港から引揚げ船に乗り博多に入港し、池田さんの佐賀県の郷里に暫く預けられました。両親は敗戦にともなう38度線以北からの日本人難民救援活動を続けていたため、ソウルに残ったからです。

—— 戦争体験で印象的なことはありますか？

ソウルでは空襲の被害はありませんでした。米軍による占領後のソウルで、米兵が進駐してきた直後、弟と私は米兵が家の玄関にいるのを見つけ、震えながら母に告げました。ところが、母は英語で二人の兵士を家に招き入れ、紅茶を入れたり、野菜サラダを作ってもてなしました。父たち医師が、日本人の

病人が貨車ではなく、客車でプサンに向かうことが出来るようにと、米軍と韓国政府高官を自宅に招いたときには、私たち子どもが母から習った「ホーム・スイート・ホーム」の歌を英語で一緒に歌うと、米軍将校たちは涙ぐんでいました。

けれどプサンからの引揚げ船では恐ろしいことが起こりました。船底の船室に乗っていた私は、新鮮な空気を吸いたくなり甲板に上がりました。その時、日本人の女の人が目に入りました。彼女は連れていた子どもを、自分の手で海に突き落としたのです。そして自らも水中に投身しました。その物音に急に人声が大きくなり、多勢の人が集まってきました。私は驚いて階段を駆け下り、船底に戻って毛布を頭からかぶり、あまりの恐ろしさにガタガタと震えていました。母子心中を目撃したのです。

——なぜ、そのような事件が帰国直前に起こったのですか？

大人たちの話によると、その女性は夫がシベリアに抑留されてしまい、その後でソ連兵に強姦されて妊娠し、日本を目前にして夫の故郷へ帰るにも帰れないという苦境に立たされてしまっていたのだそうです。子どもを道連れに自殺するしかなかったのでしょうか。戦争と女性に対する性暴力がその女性を追い詰めたのです。

1941年から1945年までの小学校時代に体験した戦争は、民族、難民、女性の身体、人権、差別、価値観の形成といった研究課題に展開していき、私にとっては生涯をかけるテーマとなりました。

(2012年1月23日収録 インタビューは国枝たか子による)

新入会員

新入会員として次の方が入会されました（前号の追加）。

会員番号	氏名	勤務先	入会日
0231	鳥養 映子	山梨大学大学院医学工学総合研究部電気電子専攻	2011/10/27
0232	名越 澄子	埼玉医科大学総合医療センター消化器内科・肝臓内科	2011/10/28
0233	大橋 弘美	NTTフォトニクス研究所	2011/10/28
0234	永田 典子	日本女子大学理学部物質生物科学科	2011/11/02
0235	吉沢 豊予子	東北大学大学院医学系研究科保健学専攻	2011/11/01
0236	千葉 恵美子	名古屋大学大学院法学研究科	2011/11/25
0237	白波瀬 佐和子	東京大学大学院人文社会系研究科	2011/12/19
0238	風間 ふたば	山梨大学医学工学総合研究部国際流域環境研究センター	2011/12/28
0239	藤岡 恵子	株式会社ファンクショナル・フルイッド	2012/01/26

(この号は、桜美林大学大学院の直井道子が係りでした。)

連絡先：女性科学研究者の環境改善に関する懇談会（JAICOWS）事務局
〒206-8515 東京都多摩市永山 7-3-1
国士舘大学体育学部田原淳子研究室
E-mail：tahara@kokushikan.ac.jp

学会事務センター：〒162-0825 東京都新宿区神楽坂 4-1-1 オザワビル
株式会社ワールドプランニング
Tel：03-5206-7431 Fax：03-5206-7757
E-mail：world@med.email.ne.jp

郵便振替口座番号 00100-8-542793